



TITLE:

<批評・紹介>佐久間吉也著「魏晉南北朝水利史研究」

AUTHOR(S):

森田, 明

CITATION:

森田, 明. <批評・紹介>佐久間吉也著「魏晉南北朝水利史研究」. 東洋史研究 1981, 40(3): 565-571

ISSUE DATE:

1981-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153831>

RIGHT:

批評・紹介

佐久間吉也著

魏晉南北朝水利史研究

森田明

本書は我が國における數少ない水利史の専門家である佐久間吉也氏が、長年にわたつて研究、公表されてきた魏晉南北朝時代の水利關係の諸論稿に、大幅な加筆補訂を加えて一本に體系化され、東京教育大學に學位請求論文として提出されたものを公刊したものである。五百頁に餘る大冊が學界の共有財産として、かかる形で世にくり出されたことは、著者の孜孜とした努力の賜として敬服すると同時に、水利史研究界においても、貴重な蓄積が加えられたものとして、同慶に堪えないところである。

最近の我が國の水利史研究において注目されるのは、從來の治水・灌漑・漕運等の狹義の研究から、農業生産や商品生産の發展との關連、賦役制との關係を通じての國家や郷紳の支配構造、都市の發展をふくむ地域開發の生態的解明等、廣汎な社會經濟史的研究にわたつての不可欠な要素としてその關連領域を擴大しつつあることである。かかる水利史研究の視角の廣角化は、個人の生活は言うまでもなく、共同體の再生産活動から國家の財政、軍事機能の維持確保等にいたる、直接間接に水と不可分な人間の社會活動を、総合的

に把握しようとするものにほかならない。

今一つは本書もその一つであるが、水利史研究の成果が王朝（時代）毎にまとめられ、水利を通じて當該時代の社會構造と支配機構との關係が、トータルに追及されるとともに、その基本的性格が解明されつつあることである。本書に先立つてすでに二、三の成果が公刊されており、近く公刊豫定のものもあるので、こうした諸研究の一層の蓄積の上に、體系的な中國水利史研究が完成されることを期待するものである。

我が國におけるこうした水利史研究の特徴と動向に對して、中國では「四つの現代化」の一環として、工業、農業、軍事と科學技術の發展のために、過去の農業を主體とした社會經濟的發展の關鍵としての、水利事業の體系的研究が積極的に進められている。その一部はすでに、武漢水利電力學院・水利水電科學研究院《中國水利史稿》編寫組「中國水利史稿」上冊として刊行されている。一日も早い中冊、下冊の續刊を期待して止まない。また同じ觀點から、黃河とともに中國の歴史的發展に重要な役割をはたしてきた長江の機能、防洪、灌漑、航運、湖泊治理等の多角的視野から、しかも古代から現代までを通史的に明らかにした、長江流域規劃辦公室《長江水利史略》編寫組「長江水利史略」も公刊されている。

南京にある華東水利學院水利史組の汪家倫氏から仄聞するところによれば、現在中國では全國的な「水利史研究會」の設立準備が進められつつあり、今秋には發足の豫定とのことである。設立の曉には我が國の同學の機關や研究者との直接的な學問的交流が可能となるので、相互の中國水利史研究の飛躍的な發展が期待できると思われる。

さて本書の意圖は著者の「序言」によれば、「本書は民衆と密接な關連のある水利問題を取りあげ、その事實關係を明らかにし、その過程において民衆と王朝との關係や、民衆と豪族との關係を論究したものである」。つまり、「水利史を究明する中で、民衆、豪族、王朝の三者の間にどのような支配關係や相互關係があるかを考え」ようとしたものである。かかる意圖への具體的なアプローチとしては、それぞれの時代（王朝）に共通して、(一)自然條件にかかわる水旱災の實情と、その應急對策の問題、(二)水旱災に對する長期對策としての灌漑問題、(三)灌漑と不可分な漕運路形成の問題、の三分野から行われている。從來水利史研究の乏しかった魏晉南北朝時代に對する、右のような多角的視野からの研究の意圖からも、評者をふくめた多くの讀者の興味をそそらずにはおかぬ著作といえよう。

二

先ず本書の章別構成を目次にしたがって記すと、次の通りである。

序言

第一章 曹魏時代の灌漑

第二章 曹魏時代の漕運路形成

第三章 孫吳朝の水旱災と灌漑

第四章 孫吳朝の漕運路形成

第五章 晉代における水旱災とその應急對策

第六章 晉代の水利

第七章 北朝における水旱災とその應急對策

第八章 北朝の水利灌漑

第九章 北魏時代の漕運

第十章 南朝における水旱災とその應急對策

第十一章 南朝の治水灌漑

序言はさきに紹介したように、本書の意圖とその方法論について述べたもので、三つの方法的意圖は、各章について一貫して適用されている。したがって以下各章を順序を追って紹介するのではなく、三つの内容毎に分け、曹魏時代、孫吳朝、晉代、北朝、南朝の順にその要點を紹介すると同時に、若干の疑問と私見をつけ加えたい。

(一) 治水、灌漑に關するものは、第一、第三、第六、第八、第十一の各章である。第一章では曹魏時代、曹魏王朝前期、同後期に分け、計十四件の灌漑工事が實施されたとして、その内容について工事監督者又は推進者、本貫、官職、施行時期、名稱等を明らかにされている。後漢末の政情不安や天災下の灌漑工事の目的は、食糧確保による民心の安定にあり、曹魏王朝成立の經濟的基盤の形成にはかならなかった。王朝前期には吳、蜀王朝との對立關係から、黃淮間ならびに河西地方の開發が中心であった。後期には沙水、潁水流域の開發とともに、陂・渠による黃淮間の連結は、南方への發展の據點となり、晉王朝成立に向けての基礎づくりであったとし、灌漑工事の目的を、曹魏王朝の成立から發展という政治過程との關連において論證されている。

曹魏政權は軍事體制的性格の濃いのが特色であり、したがって水利灌漑事業も屯田政策と密接な關連のもとで展開されていることを考えると、軍屯のみならず民屯をも含めた屯田政策の目的的、地域的機能の細かい追及がほしかった。それによって曹魏政權における

灌漑の政策的位置づけが、より明らかにしたのではなからうか。

第三章の後半は江南の孫吳朝における四件の灌漑による地域開發を検討し、その目的は一方では、成立期の江南・江北の豪族勢力の均衡の上に立つ政權が、彼等との對抗上經濟的基盤を擴大することであり、他方では曹魏王朝に對する軍事上の要請から、屯田政策の推進が必要であつたことを明らかにされている。魏・吳との分界地域の江北における屯田經營に對し、長江南岸、漢水流域では豪族による水利の振興と土地開發が行われている。彼等による民間開發が、東晉南朝時代の江南開發に先鞭をつけたものであるとすれば、その實態の解明は、その後の大土地所有制への系譜を探索の意味で重要であるにも拘らず、わずかな言及に止っているのが残念である。

あとでもふれるが、著者は灌漑工事を「水旱災に對する應急對策」に對應する「長期對策にかかわる」問題として扱えられている。すべての水利灌漑工事を一律にこのように扱えることには問題があり、水旱災に對する治水工事業と、生産力の増大や地域開發のための水利工事業とは別個に扱うべきである。かりに著者の如く扱える場合にしても、その内容は華北と江南等の地域的視點は不可缺である。第六章では晉代の灌漑事業十二件をとりあげ、それらが主として淮河流域において實施され、その半分は舊施設の改修であつたという。晉初までの陂池が無計畫に造成されたため、その被害が多くなったので、杜預は陂池の整理すべきであることを論じたと述べ、東晉中期の江西では、火耕水耨より一歩進んでいたと考えられる陂田經營、即ち通溝溉田法が行われていたことを明らかにされている。

水旱災問題を重視される著者の主張は勿論首肯し得るが、水旱災

そのものの原因（自然的・人爲的）は必ずしも明らかでない。原因の適確な把握の上に有效な水利對策が可能となるのであるから、地域性との関連と同時に、農業技術（農法）上の條件も無視できない。杜預の指摘するように、魏、晉において急造された粗雑な陂塘が、水災の原因の一つであつたことは否定できないとしても、別に當時の水田耕作技術としての火耕水耨には、大量の水が必要であつたため、その實施には一定の陂塘の開設による、貯水量の確保が不可缺であつたことも考慮しなければならぬであらう。

なお晉代においては、曹魏時代に比して豪族、貴族勢力の増大が見られるのを、西晉の黄河中流域における多數の水碾經營や、東晉中期、南方地域の武裝豪族の存在を通じて指摘されている。彼等の地方權力の形成過程にとって、水利支配や澤地の占有が具體的にどう関連するのが残された課題であらう。

第八章では北魏王朝が華北に統一政權を形成し得たのは、軍事力のほか治水灌漑、均田法の進展、牛耕の重視等、農業政策の効果であるとするとともに、北朝各時代の灌漑工事業二十件についての個別考察が行われている。結論としてはそれらの多くが舊來の施設で放任されていたもの、改修の必要のあるものを修復したもので、主要工事の地域は、中央地域と國境地域に大別されるという。前者は渭水流域から東方の洛水附近の、黄河流域の基本經濟地域であり、後者は他國との接觸地域で、北・西・南邊では食糧輸送が困難なため、自給的な現地調達體制の確立が意圖されたのであつた。兩地域とも均田法の施行後、積極的に灌漑工事が實施され、水田耕作が奨励されたことが述べられている。水旱災、特に旱災のはげしい華北にあって、均田法の實施と同時に土地生産力の増大のために、治水

灌漑を取りあげ、水田の造成をはかったといわれているが、その具體的な工事の内容は技術、施設と、實效が問題となろう。王朝の水田獎勵への政策的努力とその實效とは、必ずしも同じではない。呂思勉氏は效果的に否定的であるのに對し、著者は「渭水流域は水田が存在しているものであり、また諸州鎮には當然水田が存在していたのであるから、匠者をつかわし技術指導を行うことは、當然實效があったと考えられる」とされている。渭水流域の如く、一部の古くから開けていた地域は別として、新開地域の施設とその機能の持続性等から、實效をどの程度のものかと判斷するかは、もう少し具體的検討が必要ではなからうか。

第十一章では長江下流南部域は、水災の多發地帯であるが、穀倉地帯としての經濟的重要性から、その水利の中心課題が排水問題であったことを指摘されている。周知の如く宋代以降、いわゆる吳中水學として、當地の水利をめぐる政策論議は益々高まつて行く。南朝においてもすでに問題の重要性への認識にもとづく、獻策や上疏にもかかわらず、出征兵士の未歸還、食糧不足による男丁の徵發、就役の困難等の事情から、問題の解決は後代に残されたという。

他方南朝治下の治水灌漑二十五件について検討し、江北が十二件、江南が十三件であり、江北では北朝に對する軍事的據點として、芍陂が宋・齊・梁各朝によって改修されている。襄陽や南陽では隄・堰等の改修の實施と、江南における湖・塘等の新設、改修の實情と、湖田化も亦豪門大族の私占の對象として重要な問題であったことを指摘されている。著者によればそれらの治水灌漑工事は、概ね國家權力を背景とした地方官によって行われたといわれているが、豪族、大族による大土地所有とともに、水利施設の占有管理が

進行し、江南特有の陂・塘・湖等の水利施設の中には、山谷等に設けられた比較的小規模なものも少なくなく、それらは地域（共同體）の自主的管理によって維持されていたと考えられる。その内容については、著者自身が述べられているように、正史類とは別系統の地誌類の史料によれば、ある程度の解明が可能であると思われるので、それを試みてはしかった。

(二) 漕運路形成に關するものは、第二、第四、第六、第九の各章である。第二章は曹魏時代の漕運路の形成過程を、灌漑の場合と同じく三期に分け、計十二件について検討されたものである。曹操時代の江淮間の中潁水西道、睢陽渠をはじめ河北の漕運路網の形成は、曹操の勢力擴大過程における軍事的要請にもとづいて行われた、王朝成立の基盤づくりであり、その後の黃河南北の漕運路形成も、王朝の國內統一に重要な役割を果たすものであったことが明らかにされている。なおその間に、從來胡渭や岡崎文夫氏によって否定されていた中潁水西道は、曹操時代陳登によって開發されたこと、白馬渠と千金堀・五龍渠についても、前者の盧弼、後者の楊守敬の説を否定し、白馬王彪、陳協によってそれぞれ形成されたことを説得的に論證されているのが注目される。

第四章は孫吳朝の漕運路の形成について検討したものであるが、江南については「水經注」にも記述が少なくないとして、岡崎文夫氏の退けられた「建康實錄」を評價し、それによりながら論證が進められている。孫吳朝は建業に首都を置いたので、建業を中心とする水路網の形成が、都城經營の一環として、或いは江南の經濟中心地との流通路の確保を目的として、集中的に行われていたとされている。本來江南は自然水路が多く、航運の必要性が増大したからとい

って、華北のように人工運河を開鑿するまでもなく、水路を修理し堰埭を修築すれば、航行條件は改善し得る状況にあったのである。著者は「孫吳時代における漕運路の成立は、専制君主政權を強化する上に、極めて重要な意義をもった」とされている。

第六章の後半においては、晉代の漕運路の形成を、西晉、東晉に分けて計十三件について明らかにしている。西晉初期は首都洛陽の都城經營を中心に、後期には江南運河が改修されており、東晉に入ると従来の黃淮間の中央水路ともいべき沙水、潁水系に對し、泗水、汭水系の別の水路が開發されている。漕運事業の實際上の推進者は、地方長官や將軍であり、それらの管理支配者たる都水使者の實權は、漢代のそれより低下していると考えられている。その理由には彼等の直接的な事業への關與件數の少ないことが擧げられているが、地方長官、將軍の關與は軍政上の要請にもとづく場合のことであって、これをもって都水使者の實權の一般的低下を速斷するのは問題ではなからうか。著者の指摘が正しいとすれば、更に積極的な擧證がほしい。

第九章では北魏時代の漕運路形成は、劃期的な均田法の施行とともに、灌漑には積極的であったのに對し、消極的であったという。しかし、世祖朝では柔然の脅威に對應するために、南方から北邊各鎮への運送が不可能であった關係上、車運に比して漕運の有利性が主張されている。肅宗朝にも再び漕運の有利論が上言されているが、いずれも現實に實施されたか否かについては必ずしも明らかでない。著者の指摘の如く、一度にわたる漕運有利論の主張によって、一部蔡水、汭水の改修が行われ、後の隋代の大運河形成や唐代の黃河三門峽における轉般法成立にはたした影響は注目すべきであ

るが、自然水路の多い江南に比して、北方への漕運路形成は溝洫の開鑿等において容易でなかったため、結局勞苦の多い陸運に頼らざるを得ないのが實情であった。

(三) 水旱災とその應急對策については、第一、第三、第五、第七、第十の各章である。曹魏、孫吳、兩晉、北朝、南朝各時代に生じた主要な水旱災の事例が、水旱災年表として整理され、その時期、地域、被害狀況等が一目で理解できるように處理されている。更に水旱災頻度表、水旱災地域別頻度表も作成されていて、理解に大いに便を供している。第五章の晉代を扱った部分は百頁に及ぶスペースを割いた、本書中の雄篇である。本章を例にとると、「水旱災の狀況」については、(1)頻度と地域、(2)長期にわたる水旱災、(3)飢饉、(4)飢饉における米價騰貴、(5)飢饉における「人相賣」、(6)飢饉における「人相食」及び人命の犠牲、(7)水旱災と五胡の侵入、(8)農民の階層分化、という多面的な内容から捉えられている。他の各章もほぼ同様である。

他方これら「水旱災に對する應急對策」としては、(1)宮中府中および庶民の節約、(2)稅役宿負の減免、(3)賑恤・振貸、(4)罪人宮人の放免、(5)豪族貴族による救濟策がとられたことを、各時代について詳細に實證されている。

ところで「水旱災の狀況」のなかで災種として、水、大水、水災等として記述されているものが、著者の本書で扱われている治水、灌漑という長期對策とどう關連しているのが、明らかでないように思われる。それが自然災害か、それとも人爲的災害か、人爲的なものにも水利工事の不備や施設の毀損によるものか、戰爭手段としての水攻・水守や大土地兼併等による場合も考えられるので、原因

そのものについての追及が必要であらう。

そうした意味では、應急対策の詳細な考察をも含めて、(三)に關する各章は鄧雲特氏の如き救荒政策や、木村正雄氏のような倉制⁽⁷⁾といった社會政策的な觀點からの検討と意義づけがあれば、一層高い成果が得られたように思われる。

三

以上各章の内容を著者の提示されている三つの課題に即して、關連各章をまとめて紹介し、若干のコメントを加えたが、結果的には評者の關心から、(一)、(二)を中心にとりあげた。最後に紙幅の餘裕も少ないが、全體を通讀しての感想を二、三述べておくことにする。

先ず本書全體の行間から、著書の溫厚眞摯な人柄を彷彿とさせる研究態度がうかがえる。水經注や關係正史をはじめ、可能な限りの史料と關係業績の博搜、參照の上に、手堅い考證とその事例件數の整理が加えられている。その結果、著書自らが「序言」で述べられた「民衆と密接な關連のある水利問題を取りあげ、その事實關係を明らかにし」たいという意圖に對し、着實な成果を擧げられていることが認められる。しかし、意圖の後半にあたる「その過程において、民衆と王朝との關係や民衆と豪族との關係を論究」するという點については、現象的な事實關係に力點が置かれ過ぎて、民衆、豪族、王朝の構造的把握、特に水利を通じての民衆のあり方の究明には、必ずしも成功しているとはいへないように思われる。

周知の如く現今の魏晉南北朝研究は、貴族・豪族の支配體制におけるあり方や、官僚機構の本質的性格をめぐる、國家構造論へと收斂されつつあることを考える時、本書の如き貴重な成果の中か

ら、そうした魏晉南北朝史研究の基本的課題に對して、もう少し積極的に切りこんで行く視角がほしかった。

次に著者は灌漑、漕運、水旱災という三つの課題について、それぞれ曹魏時代、孫吳朝、晉代、北朝、南朝と時代(王朝)毎に斷面的に考察を進められている。その限りにおいて特定時期の特定課題の解明は、十分成果を擧げているが、課題相互間の關連性を明らかにすると同時に、それらを總合的に把握する一方、各時代(王朝)についても、終章Ⅱ結論として、魏晉南北朝時代を通じての全史的な發展的過程の整理があれば、全體としての理解がより明快になったであらう。それによつて、漢代からの繼承關係や、唐宋への展開をも含めた中國水利史の發展における、魏晉南北朝時代の位置づけなども明らかにし得たように思われる。

最後に著者の課題追及の中にも、黃河、長江流域、江淮間、黃淮間の各支流域等の地域的視點が考慮されていることは云う迄もないが、問題はそれらの地域的視點が、水利灌漑施設の機能や、それにもとづく水利灌漑工事の種類との關連で十分活かされていないのではなからうか。水利灌漑や漕運のあり方は、すぐれて地域的、生態的特性に規定されてその形態や内容を異にするものであるから、地域的視點と機能的、技術的内容とを不可分に把えるべきであらう。

以上著者の眞意をかえりみず、多くの望蜀の言のみを書き列ねてきたが、これらの妄言は評者を含めた後學者が本書をふまえて、今後目指すべき課題を述べたものに外ならない。請われるままに當該時期に不明にも拘らずあえて筆をとつたため、適切さを缺き蕪雜なものになったことに對し、著者ならびに讀者の御海容をお願いするとともに、著者の更なる研究への御精進と、本書に導かれた同學の

水利史研究への精進を期待して擲筆する。⁽⁸⁾

註

- (1) 例えば川勝守著「中國封建國家の支配構造」(東大出版會、一九八〇)。濱島敦俊著「明代江南農村社會の研究」(東大出版會、近刊)。中國水利史研究會編「中國水利史論集」(國書刊行會、一九八二)。斯波義信氏の水利關係諸論稿等。
- (2) 吉岡義信著「宋代黃河史研究」(お茶の水書房、一九八〇)。黃耀能著「中國古代農業水利史研究」(六國出版社、民國六十七年)。拙著「清代水利史研究」(亜紀書房、一九七四)等。
- (3) 長瀬守著「宋元水利史研究」(近く公刊の豫定)。
- (4) 水利電力出版社、一九七九。
- (5) 水利電力出版社、一九七九。
- (6) 「中國救荒史」(臺灣商務印書館、民國五十五年)。
- (7) 「支那倉庫制發達の基礎條件」(史潮、第十卷第三・四號)。
- (8) 本書の紹介あるいは書評としては、すでに伊藤徳男氏が「福大史學」第三十號(一九八〇、十)に、藤田勝久氏が「史境」第二號(一九八一、三)に執筆されているので参照されるよう附記しておく。

一九八〇年二月 東京 開
明書院 A5判 五三一頁